

「CATV 新年賀詞交歓会」 「衛星放送協会 新年賀詞交歓会」 「未来と芸術展」 「NHK スタジオパーク」

神谷 直亮

今回は、まず新年を飾った2件の賀詞交歓会についてレポートする。次いで、1月に訪れた森美術館とNHKメディアパークの展示に触れたいと思う。

「CATV 新年賀詞交歓会」

日本ケーブルテレビ連盟、日本CATV技術協会、日本ケーブルラボが共催したCATV新年賀詞交歓会は、1月15日にANAインターコンチネンタルホテル（東京都港区）で開催された。今回、冒頭の挨拶に登壇したのは、CATV技術協会の内田茂之理事長、総務省の寺田稔総務副大臣、自民党情報通信戦略調査会の山口俊一会長だ。

内田理事長は、「オリンピック・パラリンピックの年を迎え、5G、AI、顔認証、3Dセンシング採点など新しいシステムにチャレンジしなければならない。方や、新4K8K衛星放送に対応出来る受信機器の出荷台数は、もう少しで300万台を超える状況だ。CATV技術協会としてもローカル5G、IoT、AIなどの活用について技術的な研究を積極的に取り進め、ケーブルテレビという重要なインフラのより良い受信環境を整えていく」と意気込みを語った。

寺田総務副大臣は、「今年は、CATV業界にとっても5G元年であり、政府の5G予算

支援や5G導入促進のための税制措置をフルに活用して、自然災害への一層の対応、地域に根差すコンテンツの発信、4Kコンテンツのさらなる充実に取り組んで欲しい」と述べた。

山口会長は、「放送業界は、NHKのネット同時配信開始と通信事業者の5G移行により、今年は曲がり角に差し掛かると思われる。CATV業界としても政府の光化予算を活用する光回線の敷設促進、良好な4K8Kコンテンツの視聴環境の整備など、遅れ劣らず準備を進めてほしい」と要望した。

最後に、乾杯の音頭を取るために日本ケーブルテレビ連盟の井村公彦会長が登壇し「2020年は、12支最初の子（ね）年である。これにあやかり業界全体が未来に向けて新しく大きく飛躍できる年になるように祈りたい」と祈願し盃を上げた。

「衛星放送協会 新年賀詞交歓会」

衛星放送協会は、1月20日に明治記念館（東京・港区元赤坂）で新年賀詞交歓会を開催した。交歓会に先立って記者会見が行われ、小野直路会長、村山直樹副会長、岡本光正専務理事、音好宏多チャンネル放送研究所所長が出席した。

小野会長は、「2019年11月末時点での

有料多チャンネル放送の契約者数は1353万件で、残念ながら2018年同月末より約8万件減少した。今年は、激変する視聴環境に適切に対応することで減少に歯止めをかけ、増加基調に転じることができるよう積極的に活動を展開する」と決意を述べた。また「新4K8K衛星放送を視聴できるテレビ、チューナーなどの出荷台数が、昨年11月末で270万台を超えた。東京オリンピック・パラリンピックを契機にさらに増えていくと予想されるが、BS左旋による放送事業者の運営やBS右旋による新たな3チャンネルのコンテンツ拡充などの面で、協会としても必要な取り組みを強化してゆく必要がある」との強い認識を示した。

村山直樹副会長は、節目の第10回を迎えるオリジナル番組アワードについて説明し「今年も9月1日に讀賣大手町ホールで実施する」との発表を行った。

岡本光正専務理事は、有料テレビ広告の状況と今後の対策に触れ、「CAB-J（衛星テレビ広告協議会）がまとめた昨年度の広告総売り上げは、前年比95.8%の198億円だった」という。今後の広告獲得強化策としては、「地上波放送事業者による新視聴率調査計画に基づくCAB-J独自の次世代接触率の調査・検討を進めて強化策を打ち出す」と述べた。



写真1 CATV技術協会の内田理事長は、「ローカル5G、IoT、AIなどの活用について技術的な研究を積極的に取り進める」と意気込みを語った。



写真2 衛星放送協会的小野会長は、「有料多チャンネル放送契約者の減少に歯止めをかける」と決意を述べた。



写真3 森美術館で開催中の「未来と芸術展」では、AI、ロボット、VR/ARなど未来のビジョンが一堂に会していた。



写真4 「未来と芸術展」の目玉は、「AI x 美空ひばり」スペシャルバージョン（等身大 3D 4K 高画質映像）の上映であった。



写真5 ロボットの展示では、Groove X 社製の家庭型ロボット「LOVOT（らぼっと）」が人気を呼んだ。



写真6 VR/ARの展示コーナーでは、日産、パナソニック、カヤックが共同開発した「未来の自動運転」が注目を集めた。

賀詞交歓会で来賓挨拶に登壇した総務省の吉田眞人情報流通局長は、「放送をめぐる受信環境が急変しているが、放送の社会的役割が大きく変わったわけではない。総務省としては、衛星放送事業者を始めとする関係者とのコミュニケーションを密に取りながら、放送の社会的な一層の発展、視聴者の利便性の向上に資する政策をこれからも推進・支援していく」と力強く語り参加者を顔かせた。

「未来と芸術展」

お正月休みに森美術館（東京・港区六本木）を訪れた。目的は、「人は未来をどう生きるのか」をテーマに掲げた「未来と芸術展」を見るためである。同展示会は、昨年の11月19日から今年3月29日まで開催されており、AI、ロボット、VR/ARなど未来のビジョンを展示している。

AIの目玉は、1989年に死去した美空ひばりをAIで復活させ、「あれから」を熱唱させる「AI x 美空ひばり」スペシャルバージョンの上映だ。会場に特別シアターを設けて、3D 4K 高画質映像と5.1チャンネル音響で、文字通り新曲「あれから（Ever Since Then）」のステージを再現して見せていた。説明員によれば、「ひばりという主役のAI等身大映像の他に、音色、音程、ビブラート、タイミングの4つの役割に特化したAIを配置して完全な再現を目指した」という。技術的には、YAMAHAが開発した「VOCALOID:AI」による深層学習や音声合成が貢献している。

筆者は、視聴する機会がなかったが、すでに2019年9月29日にNHKがNHK

スペシャルで「AIでよみがえる美空ひばり」を放送しており、12月31日には、第70回紅白歌合戦でも放送したもので初公開ではないとのことであった。

シアターで視聴した感想を述べると、映像面では目の輝きがないのと上唇の動きがやや不自然に映った。歌唱面では、ビブラートを少し抑え込んでしまっているような感じがして、ひばりの人間味よりAIのクールさが表に出ているような印象を持った。

ロボットの展示で目に付いたのは、Groove X社製の家庭型ロボット「LOVOT（らぼっと）」とソニー製の「aibo」の2種であった。「LOVOT」は、「Love」と「Robot」から生まれた名称で、昨年8月末に発売を開始したという。特色は、クリクリした目と愛らしさだ。説明員は、「命はないのにあったかい。幸せな気持ちを満たしてくれる」とPRに余念がなかった。

ソニーの愛らしい犬型ロボット「aibo」は、2018年1月11日に発売されたというからすでに3歳になった。今回の会場には、2019年限定の特別カラーモデル「aibo チョココエディション」が出展され来場者の注目を集めていた。

VR/ARのデモを行ったのは日産だ。パナソニックとカヤックの協力を得て製作したという「未来の自動運転：Nissan Intelligent Driving」の運転席では、実際に画面上に現れる景色に、地理、天気、建物の陰に隠れている歩行者などの情報を重ねて見ることができる。一方、助手席には、別の空間にいる家族や友人がアバターのカチで乗り込める。つまり、そこにいない人

たちとドライブを楽しめるという優れたものだ。VR/AR用のヘッドセットには、台湾のHTC社製「VIVE」が使われていた。

既述のAI、ロボット、VR/AR以外で注目を集めたのは、オーストラリアのハッセル・スタジオとイギリスのEOCが考案した3Dプリンター製住居の紹介だ。近い将来に火星に移住し、現地で組み立てることを前提したもので来場者の関心を呼んでいた。説明によれば、「この住居をベースにして4人の宇宙飛行士が1年間働くことができる」という。

NHK スタジオパーク

1月15日の午後、久しぶりにNHKスタジオパークを覗いて見た。令和2年に突入したというのに、ロビーの大スクリーンでは、相変わらず昨年の8Kコンテンツを再生しておりあきれ返った。つまり、「第69回紅白歌合戦」「奇跡の山寺、室生寺」「ルーブル時を超える」「8Kであそぼう」の4本で、筆者の記憶が正しければ半年も同じコンテンツを上映している。唯一の救いは、地下1階の8K特別視聴コーナーで、10名ほどの女性ファンと一緒にThe Yellow Monkeyのスーパーライブの放送を楽しむことができた。2019年7月にさいたまスーパーアリーナで収録したライブの再放送で非常に見応えがあった。

Naoakira Kamiya
衛星システム総研 代表
メディア・ジャーナリスト